

直観の起源としての「語りえないもの」
——詩歌と「言語の外」に関するボルノウの思想——

Something unspeakable as the origin of intuitions
—Bollnow's theory on poem and Recognition beyond languages—

井谷信彦*
ITANI, Nobuhiko*

要旨

本稿の課題は、ドイツの教育哲学者ボルノウ（O. Fr. Bollnow）の思想に見られる、直観の起源に関する洞察を解明することにある。彼の言語論、直観論、情感論を並べて読み解くことにより、言語による認識のなかで共に輪郭を縁取られている、言葉によっては語りえない「言語の外」に、直観の起源が見定められることになる。この探索によって、言語・直観・情感の関係に改めて光が投げかけられるとともに、人間の認識と「語りえないもの」との関係が新たに捉えなおされる。

1. 直観の起源へ——本稿の課題と射程

本稿の課題は、二十世紀ドイツの教育哲学者ボルノウ（O. Fr. Bollnow）の言語論、直観論、および情感論を通覧することによって、直観の起源に関する彼の洞察を解明することにある。

人間学を基礎とするボルノウの教育理論に関しては、これまでも詳細な検証が行われてきている。例えば、岡本英明による著作〔岡本 1972〕をはじめ、キュンメル（Fr. Kümmel）の編纂による論集〔Kümmel 1997〕や、廣岡義之の著作〔廣岡 1998〕、ケレンツ（R. Koerrenz）による著作〔Koerrenz 2004〕などがある。本稿の主題である言語の制約を超えた直観の問題も、複数の著作のなかで詳細に検証されている。

例えば廣岡義之によって明らかにされているように、ボルノウは、人間の認識における言語の役割を重視しており、言語のほかに現実への通路はないと説いている。直観教授の伝統に見られる、概念を媒介としない直観が認識の出発点にあるという前提は、間違いであるとして退けられる。我々人間は幼いときから、言語によって型取られた世界に住まうものであり、言語をとおして現実を把握しているものである。この言語による制約を突破することによって初めて、囚われのない直観を獲得することができる点に、ボルノウの認識論の特徴を見ることができる〔廣岡 1998 上: 123ff. & 261ff.〕。

だが、言語よりほかに現実への通路を認めないとすれば、言語の制約を超えた直観の内実もまた、言語を媒介として感得されていなければならないはずである。この

問題をボルノウはいかに捉えていたのだろうか。言語による認識より後に獲得されるはずの直観の内実が、言語による認識のうちにすでに準備されているのだとすれば、これは言語のいかなる働きによるものか。

管見のかぎりによれば、直観の起源に関わるこの問題を詳細に検証したものは、ボルノウの教育思想に関する従来の議論のなかには見られない。また、ボルノウ自身による著作のなかにも、この問題を直接に説き明かした箇所はないようである。言語の制約を超えた直観の内実が、言語を媒介とする認識のなかで、いかに感得されているのか。この点を明らかにするべく本稿は、ボルノウの言語論、直観論と並べて、情感論をもあわせて読み解くことにしたい。これにより、ボルノウ自身によっても直接には詳論されていない、直観の起源に関する洞察が解き明かされることになるだろう。

本稿の帰結を予告しておくなら、言語の制約を超えた直観の起源は、言語による認識のなかで共に輪郭を縁取られている、言葉によっては語りえない「背景」としての「言語の外」に、見定められることになる。この探索により、言語・直観・情感の関係に改めて光が投げかけられるとともに、我々人間の認識と「語りえないもの」との関係が新たに捉えなおされるはずである。ボルノウの言語論、直観論、情感論を並べて読み解くことにより、彼自身によっても直接は詳論されていない、直観の起源としての「言語の外」への探求を遂行することが、本稿の課題である。この探求によって、言語・直観・情感をめぐるボルノウの教育思想に関する、新たな知見と探索の領野が拓かれることが期待される。

* 武庫川女子大学 (Mukogawa Women's University)

2. ボルノウの認識論にみる言語と直観の関係

2-1. 言語から直観へ

ボルノウが、人間の認識 (Erkenntnis) における言語 (Sprache) の役割を重要視していたことは、広く知られている。認識はいつもすでに言語を媒介としており、言語を抜きにして世界や自己を捉えることはできない、と彼は説いている。言語以外に現実接近するための通路はなく、人間は言葉を媒介として初めて現実を捉えることができるのだ、というのである [SE: 146f.]。

こうした洞察の支えとなる証言として、ボルノウは、フレーベル (Fr. Fröbel) の議論を援用している。かつてフレーベルは、子どもにとってあらゆるものは「言葉をとおして」生成してくるのだ、と説いていた。たとえ目が或るものを見ているように思われたとしても、子どもにとってみればそれは、言葉になる以前には「まったく存在していなかった」のだと。言い換えるなら、言葉が初めて子どもにとっての事象を「創り出した」のだ、ということになる [Fröbel 1951: 56] [cf. SE: 119]。

ここからボルノウは、言葉はあらかじめ存在している事物に後から付加されるようなものではなくて、むしろ言葉が初めて事物を「創り出す」のだと結論している。我々が周囲世界のなかに見るものは、言語によって名前を付与されたものだけであり、ほかのものは存在していないのも同然、ぼんやりと一緒に与えられた背景にすぎない、というわけである [SE: 119f.]。ここには、人間の認識における言語の役割が明示されているだけでなく、存在者の「存在」(Sein) と言語との密接な関係が示唆されており、非常に興味深い。

さらに続けてボルノウは次のように説いている。人間は言語を媒介としてのみ現実への通路をもつ。知覚の最も単純な作用でさえ言語を媒介として起こる。我々は決して「裸のまま」の現実を眺めることはできない。このため、言語の背後に横たわる現実について語ることは、何の意味も持たない。我々が言語をとおして捉えるものこそが現実だからである。この現実には言語のなかにおいてのみ我々に与えられている。言語を離れて現実を表象することはできない [SE: 146f.]。

以上のような洞察にもとづいて、ボルノウは、ラトケ (W. Ratke) やコメニウス (J. Comenius) に始まる直観教授 (Anschauungsunterricht) の伝統に、鋭い疑問を投げかける。直観教授の特徴は、まず事物そのものを明瞭に見せること、すなわち、直観させることから始める点にあった。言語は、直観 (Anschauung) を確固たるものにまで高めるために、あとから初めて付け加えられるべきものとされる。これにたいしてボルノウは、言語による解釈のなかで初めて事象が捉えられるのだとし

て、異論を唱えたのである。直観は認識の始めに与えられているわけではなく、言語による認識に後から基礎を付与するのだ、というわけである [SE: 158ff.] (1)。

こうしてボルノウは、言語を媒介とする子どもたちの現実認識を、直観によって「充実」させることを、教育の課題として提示するにいたる。これによれば、言語をとおして与えられた子どもたちの理解は、「無規定な」(unbestimmt) ものに留まるのだという。この「無規定なまま知られている何か」を、言語を超えた直観による「規定性」(Bestimmtheit) へともたらすことが、教師の役割なのだということである [SE: 161f.]。以上のように、直観教授の伝統とは異なって、言語を媒介とする認識や概念による把握のほうが直観より前に与えられており、直観はこれを充実させるべく「後から」獲得されなければならないと説いた点に、ボルノウの教育理論の特徴を見ることができる。

2-2. 「固有の存在」の直観

このとき、言語をとおした認識を直観によって「充実」させるというボルノウの教説には、単にすでに概念把握されたものを再認するという以上の、特別な射程が含まれている。言語による認識の後へと置き移された直観は、日常の実践に関わるあらゆる要求から解放された、開かれた観想として定義されている [PE: 71]。諸事物を実践に関わる利害関係から眺めるのではなくて、現実の十全な豊かさを受け取るという点に、直観の特徴があるとされる。直観とは有用性の偏重から解放されたモノの見方であり、事物を「固有の本質」において把握することなのだということである [DGW: 81f.]。

我々は普段、事物を「ありのまま」見ているわけではなく、言語を媒介として見知られた世界のなかにおいて、日々の生活の実践に関わる観点から、諸事象を理解しているものである。ベルグソン (H. Bergson)、デューイ (J. Dewey)、ハイデガー (M. Heidegger) らの思想に倣って、ボルノウはこのように説いている [PE: 31ff.]。認識論の伝統は、直観は認識の発端に単純に与えられていると教えてきたが、これは間違いだといわれる。我々人間は、普段は自明視されている実践に関わる利害関係を突破することによってのみ、囚われのない純粋な直観に至るのだというわけである [PE: 71ff.]。

この言語を超えた直観は、あらかじめ持ち込まれた前理解からの解放を前提としている、とボルノウは説く。実践に関わる利害関係を超越した直観は、認識の領域全体を突き破って、これと対立するかたちで、まったく新たな驚くべき自由を開くのだと。日常生活における理解の慣習から解放されて、あらゆる概念による把握を突き抜けたところに、開かれた観想としての直観が生起するのだということである [DGW: 80ff.]。

ギール (K. Giel) らの議論を引用しながら、ボルノウは、以上の洞察から導かれる教育の課題を明らかにしている。子どもたちは言語によって型取られた世界へと生まれ育ち、日々の生活の実践に関わる観点から事物を眺めている。子どもたちをこの実践に関わる利害関係から解き放ち、直観へと導くことが教育の重要な課題であるとボルノウはいう [AP: 95ff.]。

加えて、この直観の獲得という課題は、子どもだけのものではなくて、大人にとっても重要な意味をもつ、ともいわれる。「生命の刷新」(die Erneuerung des Lebens) に関するフレーベルの議論のうちに、ボルノウは、大人にとっての直観の獲得という課題を見ている。日常の実践を離れた直観へと立ち戻ることによって、大人もまた、世界の豊かさへと開かれた若き存在に、再び回帰することができるのだといわれる [AP: 99f.]⁽²⁾。

このように概念による把握を超えた直観に至るための方途として、ボルノウは、日常生活において稀に見られる僥倖によるほかに、絵画や詩歌といった芸術作品との出会いをあげている。なかでも特に詳細に論及されているのが詩歌 (Dichtung) である。言語を用いた芸術である詩歌が、いかにして言語の「外」にまで到達しうるのかという問題は、ボルノウが晩年に至るまで取り組み続けた課題だった。

2-3. 言語と詩歌の関係

ボルノウによれば、詩歌とは言語の最も高められた、あるいは最も純粋な形式である。このため、言語の本質を捉えるためには、詩歌に目を向けなければならない、といわれる。ここからボルノウは、人間の認識は言語に媒介されているという議論を、「言語」を「詩歌」に置き替えて反復している。

1964年の『言葉の力』によれば、人間の生活に活動の余地を与えているのは、詩作者によって型取られた世界にほかならない。我々は、詩作者のもとで学んだとおりに、感じたり、感じ取ったり、喜んだり、苦しんだり、愛したり、憧れたりしている。言い換えるならこれは、人間が詩作者によってこの世界に閉じ込められており、ここから抜け出せないということでもある [MW: 63]。とはいえまた、真の天才ともいべき詩作者の特徴は、現にある枠組を突き破ってゆく点にある、ともいわれる。詩作者は、まだ定型をもたない未踏の現実へと突き進み、これまでにない新たな枠組のなかにこれを捉える。このようにして詩歌は、理解された世界を拡大してゆくのだ、というのである [MW: 67f.]。

こうした働きは詩歌に固有のものではなく、言語一般に備わっているとボルノウはいう。人間は、単に言語の牢獄に囚われているわけではなく、言語と格闘しながら言語を創り、言語を創ることで現実を創っていく。言語

による認識の射程を拡大することは、同時に我々の世界を広げることであり、我々の生活の領域を豊かにすることでもあるといわれる [MW: 69ff.]。

普段の認識の枠組を突き破って未踏の現実を捉える、という詩歌の働きには、見方によっては、日常の実践を離れた直観への跳躍を、読み取れるようにも思われる。たしかに、未知の現実への突破という詩歌＝言語の働きには、旧来の言語による理解の「外」へと向かう、認識の運動が見てとれる。だが本書においてこれらは、言語による認識の射程の拡大という文脈で捉えられており、あくまでも、言語によって型取られた世界の拡張として説明されている。本書の詩歌論においては、言語を媒介とした認識を離れた直観への突破は、話題にされていないと見るべきだろう。

2-4. 詩歌を通路とする直観の獲得

これにたいして、1970年の『認識の哲学』には、詩歌と直観との関係が、直接に論及されている。芸術作品の描写をとおして初めて、我々は直観＝「事物そのものを見ること」を学ぶのだ、とボルノウは説く。最初の事例として提示されているのは絵画である。眼前に純粋な「形象」(Bild) を示すことによって、人間を純粋な直観へと置き移すところに、絵画の働きがあるといわれる。我々は絵画を見ることにより、普段の生活のなかでは飛び越えられている、純粋な直観という始源へと行き着くのだというのである [PE: 76]。これと同様のことが詩歌にもあてはまるといわれる。ボルノウによれば、詩歌が我々の心を捕えるのは、あたかも目が「見ることへと」解き放たれたかのように、日常生活のなかで抑圧されていたものが解放されるからである。まさにこうした意味において、絵画とおなじく詩歌も、人間に「見ることを教える」のだといわれる [PE: 77]。

我々は立ち止まって感じとる。ああ、まさにそうだ、わたしはこのことを基層 [Grund] においてはいつも知っていたのだが、これが詩歌によって初めて明らかになったのだと。まるで「目から鱗が落ちた」かのようなのである。とはいえここでは、目に見えている外観が問題であるというよりは、情感の内実とそのうちで開かれる本質の認識のほうが問題である。一般に人間の感情や、人間の態度、人間の闘争など、人間の生の出来事全体が、詩歌の言葉のなかで、初めて我々に見えるようになる。詩歌の言葉の導きによって初めて我々は、この出来事の全体を、再び現実のなかに発見するのである。 [PE: 77]

加えて、講演論文「世界の認識の器官としての詩歌」(1973年)は、いっさいの目的に囚われることなく直観

させることを、言語一般にはない詩歌固有の特徴として提示している。これによれば、日常の言語は人間の欲望の現われであり、また人間の利害関心を貫徹するための手段であるという。言語はたしかに我々に現実を見せてくれるが、この現実はいつも人間の欲望のほうから眺められており、欲望によって歪められているといわれる。言語によって構築された日常の世界のなかで、我々は、利害関心や権力闘争、ありうる利益と損失、技術操作の網などに、絡め取られているとボルノウは説く。言語はさしあたり実践に関わる利害関係のなかで働いているものであり、日常の「装置」のなかに組み込まれているのだというのである〔DOW: 11〕。

これにたいして詩歌は、事物に何も望むことなく単に見ること、日常の利害関係を離れた観想としての直観を、我々に教えるのだといわれる。詩歌をとおして見ることは、人間の支配欲によって濁らされていない純粋な把握として、説明されている〔DOW: 12f.〕。詩歌による描写は日常の言語とは異なり、事物が向こうから現れてくるおりに、誤って単純化したりすることなく、完全な豊かさにおいて見せようとするのだ、というわけである〔DOW: 16〕。このようにして「見ること」を、ボルノウは、目的を離れて没頭している直観としての眺めること、あるいは「本当の直観」と呼んでいる。

詩歌は世界把握のための一つの器官〔ein Organ〕ではあるが、世界の支配という意味での世界把握のための器官ではない。日常生活の方針決定に奉仕するわけではないのだ。むしろ、あらゆる実践上の視点を離れ去って、生命の充実と豊穡を見せてくれ、我々を幸せに豊かにしてくれる器官として、〔詩歌は〕世界把握の器官なのである。〔DOW: 17〕

以上に見てきたように、言語による認識と人間の利害関心のあいだの密接な絡み合いを見抜いたうえで、目的合理性の偏重から解放された直観の獲得を課題として提起したことは、ボルノウの認識論の重要な特徴であるといえるだろう。

3. 直観の起源に向かう探求の問題設定

以上が、言語を媒介とする認識と、この認識を突き抜けた直観、および詩歌の働きに関する、ボルノウの理論の概要である。こうして見てくると、ボルノウの認識論における言語・直観・詩歌のあいだには、興味深い関係があるとわかる。第一に、人間は言語以外に認識の通路をもたないと説かれながら、「事物そのもの」を見ることとしての直観にも働きが認められていること。第二に、この言語の制約を超えた直観が、絵画のような視覚優位

の芸術によるだけではなく、詩歌という言語優位の芸術によっても、獲得されると説かれていること。第三に、詩歌を通路として初めて獲得される直観の内実は、詩歌によって見えるようにされる以前から、実は「いつも」知られていたのだといわれること。これらのうち、以下の議論の主題として本稿が特に注目したいのは、直観の起源に関わる第三の論点である。

言語以外に現実への通路を認めないとすれば、言語の制約を突き抜けた直観の内実もまた、言語を媒介として感得されていなければならないはずである。直観が獲得される以前から直観の内実が知られていたという証言を、額面通り受け取るなら、ここには言語を超えた直観が言語によって準備されていたことが示唆されている。言語の射程に収まらない現実の十全な豊かさは、言語を媒介とする認識のうちで「いつも」知られており、これが詩歌の言葉を通路として「再び」発見されるのだ、というわけである。とはいえ、言語を媒介とする認識を超えた直観の内実が、直観の獲得以前に言語を媒介として知られているのだとすれば、これは言語のいかなる働きによるのだろうか。いかにして、実践に関わる利害関心を離れた直観の内実が、人間の欲望の現れである日常の言語のなかに、与えられているというのか。

管見によるかぎり、言語と直観の関係を説き明かそうとするなら避けては通れないはずのこの問題について、ボルノウは詳細な議論を残していない。この問題に取り組むためには、ボルノウが「言語の外」の問題を扱った別な論稿に、探索の糸口を求めなければならない。本稿が参照するのは、喜ばしきや不安など種々の「情感」(Stimmung)を扱った、ボルノウの初期の論稿である。ボルノウの言語論、直観論に加えて、情感論を並べて読み解くことによって、直観の起源を問い求めるこの探索に、重要な示唆が与えられるものと期待される。

4. ボルノウの認識論にみる「言語の外」の問題

4-1. 情感をとおした世界の発見

1941年刊行の『情感の本質』のなかで、ボルノウは、ハイデガーの情調論を継承・批判しながら、人間の認識における情感の役割を明らかにしている。これによれば、情感とは人間の本質の欠くべからざる構成要素であり、他のあらゆる精神生活の「基盤」(Untergrund)なのだという。我々がいかに事物に向きあうのか、この事物がいかに立ち現れてくるのかは、情感によってあらかじめ制約されているのだと〔WS: 54f.〕。人間が出会うものは情感のなかですでに一定の解釈を受けており、あらゆる理解はこの情感によって最初から導かれているのだ、というのである〔WS: 57〕⁽³⁾。

実際に我々は存在論の観点からすると、世界の最初の発見〔Entdeckung〕を、原則として「単なる情感」に委ねなければならない。〔Heidegger 1927: 138〕

とはいえ、情感によるこの「発見」は、世界や自己を一定の対象として、明晰に把握しているわけではない。ボルノウによれば、情感は特定の対象に関係するものではなく、対象に関しては「まったく無規定に留まる」という〔WS: 34f.〕。なぜなら情感は、主体と客体が区別される対象把握とは違い、これら両者の統一性において生じてくるからである〔WS: 39〕。

この点において情感は、喜びや恐怖など、特定の対象をもつ感情（Gefühl）から区別される。とはいえ、情感と感情を明確に区別することは、実際には難しいだろうともいわれる。例えば幸福や憂愁などは、明確な対象に関わる場合もあれば、対象が曖昧な場合もあるだろう〔WS: 37〕。こうした例に関しては、特定の対象との関連が強い場合には感情と呼び、関連が弱い場合は情感と呼ぶのが、実情にあっているように思われる。ボルノウの思想の中心概念である希望や被護性も、場合によって、情感と感情のいずれかの性格を認められている。

このように感情から区別された情感は、世界から隔絶された自己の「内面」に帰属するものではなく、いわばこれら両者を一緒に包み込んでいるといわれる。情感によって「発見」されるのは、ハイデガーの用語を借りるなら、「世界内存在」（In-der-Welt-Sein）としての人間の、現存在（Dasein）の全容であるといえる。このように、世界や自己が対象として捕捉される以前の、認識の基盤に関わっているという点に、情感の重要な特徴が見てとれる、とボルノウは説く〔WS: 39f.〕。

こうして、対象については無規定な情感の特徴を明らかにすることで、我々は、概念の及ばない直観の起源を探索するための、最初の指針を得ることになる。

4-2. 情感と言語の関係

以上のように、ボルノウの認識論においては、情感があらゆる認識のための基盤として、非常に重要な役割を認められている。だが、第2節にも見たようにボルノウは、人間は言語を抜きにして現実に接近することは叶わない、とも説いていた。だとすれば、これら情感と言語のあいだには、いかなる関係が認められるのだろうか。再びボルノウの言語論に戻って、情感による世界と自己の発見の、消息を辿ってみることにしよう。

人間は、言葉をもちいて言葉のなかで、無規定な生の基層（Grund）から現実を奪い取ることにより、初めてこの現実を獲得するのだ、とボルノウは説く〔SE: 94〕。語られた言葉のなかで初めて、まさに事象そのものが、明確な規定性に至るのだといわれる。言語を最大限に働

かせて、世界と自己の無規定性から確固たる形姿を勝ち取ることによって、初めて現実が獲得されるのだというわけである〔SE: 97〕。

ボルノウの情感論を読み解いてきた我々は、ここで無規定な基層（Grund）と呼ばれているものと、あらゆる精神活動の基盤（Untergrund）としての、無規定な情感による世界と自己の「発見」とのあいだに、密接な関連を読み取ることができる。

このため次のことが肝要である。無規定なまま感取されたことを言葉にして、加えてこの言葉のなかで解釈・明示することによってのみ、我々は、取るに足りない漫然とした生の無感覚さと、無規定のまま我々を包んでいる世界の不明瞭さから、形姿を——またこれと一緒に実質を——勝ち取るのだ、ということである。〔SE: 96f.〕

喜ばしさや不安といった情感によって、無規定なまま発見された世界と自己は、言語の働きによって初めて、明確な規定性を備えた「対象として」認識される。情感は現実がいかに捉えられるのかに制約を与えているが、世界や自己を一定の対象として認識しているわけではない。また、人間は言語を媒介として初めて現実を認識することができるが、この言語による認識はいつも一定の情感によって制約を受けている。対象としての現実、言葉の解釈のなかで初めて、情感によって発見された無規定なままの基層から、規定を与えられたものとして、形成されるのだというわけである。

とはいえ、ここへきて新たに疑問が生じてくる。本節において我々は、情感によって無規定なまま発見された現実、言語によって初めて明確な規定を与えられる、というボルノウの理論を見てきた。これにたいして第2節においては、言語を媒介とする理解ははまだ無規定な理解であり、直観によって充実されなくてはならない、というボルノウの見識が明らかにされた。情感における無規定性と言語による規定、および、言語に見られる無規定性と直観による規定、これらのあいだにはいかなる関係があるのだろうか。

これは単に、情感による発見よりも言語による理解のほうが明確であり、言語による理解よりも直観のほうが明確であるという、程度の差の問題だろうか。または、情感における無規定性と言語における無規定性、言語による規定と直観による規定のあいだには、程度の差に留まらない特別な違いがあるのか。次項に明らかにされるように、ボルノウの答えは後者である。

4-3. 「語りえないもの」との緊張関係

本項の結論を予告しておくなら次の通りである。ボル

ノウによれば、情感による世界と自己の発見の無規定性は、情感が対象をもたないことに由来していた。これにたいして、言語を媒介とする認識の無規定性は、言葉をもちては「語りえないもの」(das Unsagbare)に目を向けることで、初めてその由来が明らかにされる。以下に詳しく見ていくことにしよう。

ボルノウによれば、言語を媒介とする認識は、情感によって発見された世界内存在の全容を、与えられたまま捉えることができるわけではないという。言葉において人間は自己自身から脱落するものであり、語られた言葉はもはや、これが語るはずだったものと、完全に同じではありえないというのだ。ヘーゲル(G. W. F. Hegel)やマルクス(K. Marx)の思想に言及しながら、ボルノウは、あらゆる言語表現は「一種の疎外」であるとさえ説いている[SE: 94]。

とはいえ、言語は世界内存在の全容を捉えられない、というこの特徴を、言語の欠陥として受け取るのは早計である。語られた言葉と語りえない基層のあいだの緊張は、言語の内奥の本質に属している契機であって、取り除くことはできないのだ、とボルノウは説く[SE: 95]。一定の状況のなかで発せられた言葉は、語られざるものという背景(Hintergrund)との関係のなかでだけ、活きいきと働くのだといわれる[SE: 98]。語られざるものという基盤の全体に、緊張を保ちながら関わりをもっているときにのみ、言葉は機能を果たすことができるのだ、というわけである。言葉がこの語りえない基盤から引き離されて、人々が勝手に利用することのできる所有物となったなら、言葉は機能を失って変質してしまうのだ、とボルノウは推論している[SE: 113]。

加えて、この「語りえないもの」との緊張関係から、我々が普段使っている言語における、「意味の無規定性」が生じてくる。例えば、ドイツ語の「Spiel」(遊び)または「spielen」(遊ぶ)という言葉は、非常に幅広い意味にもちいられている。Spielには「遊び」という意味のほかに、ゲーム、競技、賭事、企み、いたずら、冗談、不規則な動き、演劇、楽曲、演技、演奏などの多岐にわたる意味が認められる。ボルノウによれば、これらの異なる事象を一つの中心から取り集めている点に、言語の創造性豊かな働きが見られるという。このように種々の事象を取り集める、単純には定義されえない言語の働きを、ボルノウは、リップス(H. Lipps)の術語を借りて「想念」(Konzeption)と呼んでいる[SE: 139f.]。

想念の特徴に関する次のような議論には、言語の本質に関わる語りえない基層との深い関係を、読み取ることができる。ボルノウによれば、想念は多岐にわたる言葉の活用可能性を取りまとめているが、これを特定の定義によって捉えて固定してしまうことはできない。想念をなんとかして明確に定義しようとしても、いつも定義に

は解消しきれないものが残る。むしろ、この定義に収まらない残余のなかにこそ、言語の本来の秘密が隠されているのだ、とボルノウは説いている。日常生活のなかでもちいられている個々の単語も、避けられない無規定性のうちに留まっている。想念の無規定性は、言語の働きの本質に属している契機であって、決して取り除くことができないのだ、というのである[SE: 143f.]。

以上の検証によって、ボルノウの認識論に見られる、言語を媒介とする認識の無規定性が、由来と特徴を明らかにされた。情感によって全体として発見された、明確には語ることでできない基層との関係において、言語は固有の無規定性を抱えている。言語のこの無規定性は、日常の言語使用においては、定義によって固定することの叶わない、言葉の意味の無規定性として現れてくる。言葉によっては捉えられない基層に関わるかぎり、言語を媒介とする認識には、厳密な定義を拒む無規定性が残される。この日常の言語を媒介とする認識の無規定性を、取り除くべき欠陥ではなく、むしろ言語の内奥の本質に属するものとして捉えなおした点に、ボルノウの認識論に固有の賢察があるといえる。

さらに、ボルノウの認識論に見られる「無規定性」(Unbestimmtheit)と「規定」(Bestimmung)の連関が明らかにされたことで、言語・直観・情感のあいだの密接な関係が解明された。情感によって対象としては無規定なまま「発見」された世界内存在は、言語によって明瞭な規定を与えられ対象として「認識」される。だがこの言語を媒介とする認識は、世界内存在の全容に形姿を与えることができるわけではなく、「語りえないもの」との関係由来とする無規定性を帯びている。この言語による認識の無規定性を「充足」するのが、絵画や詩歌などの芸術作品の働きによって獲得される、言語による認識を超えた直観にほかならない。

4-4. 直観の内実が「知られて」いる舞台

以上の検証をふまえて、第3節に立てられた問題に、立ち返ることにしよう。言語を媒介とする日常の理解を突き抜けた直観の内実が、この直観の獲得以前に言語を媒介として感得されているのだとすれば、これは言語のいかなる働きによるのか。世界と自己にまつわる言語をもちいた認識は、いかなるかたちで、概念を超えた現実の豊かさを「知って」いるというのか。

ボルノウの理論によれば、情感によって無規定なまま「発見」された世界と自己は、言語によって明確な規定を与えられて認識される。だがこのとき言語は、情感によって発見された世界内存在の全容を、与えられたまま捉えることができるわけではない。語られた言葉と語りえない「基層」のあいだには、取り去ることのできない緊張関係が残される。言葉にすることの叶わない基層と

関係をもつかぎり、日常の言語による理解にも、厳密な定義を拒む無規定性が残されることになる。この言語の内と外の緊張関係を由来とする認識の無規定性を、言語の本質に属するものとして捉えた点に、ボルノウの理論の重要な特徴があると見ることができる。

ここにおいて、言葉によっては捉えることのできない「言語の外」への示唆が、語りえないはずのものでありながら、ほかならぬ言語を媒介とする理解のうちに与えられていることが、判然としてくる。

言語は事象に一定の規定を与えることによってこれを捉えるが、このとき言葉によっては語りえない基層との緊張関係が残される。言語によって特定の事象が捕捉されるときにはいつもすでに、言葉によっては捉えられない背景が沈黙のうちに型取られている。言葉によって語りえない基層は、語りえないというかたちで「語りえないもの」として、言語をとおして言語の外に輪郭を与えられているのだ。言語の本質に帰属している「語りえないもの」との緊張関係こそ、言語を媒介とする日常の理解を突き抜けた直観の内実が、この直観の獲得以前に言語をとおして「知られて」いる舞台なのである。ボルノウの言語論、直観論、情感論を並べて読み解くことにより、我々はこのように推断することができる。

加えて、直観の起源に向かう探求のなかで、「基層」(Grund)、「基盤」(Untergrund)、「背景」(Hintergrund)といった用語が、ボルノウの思想のなかで、独特の連関をなしていることが、浮かびあがってきた。情感による世界内存在の発見とは、ここから言語を媒介とする認識が獲得される基層であり、「語りえないもの」としてこの認識を支える背景であり、このようなものとして、認識を含めたあらゆる精神活動の基盤なのである。これまでの検証に依拠するなら、この「言語の外」として輪郭を縁取られた認識の基層にこそ、ボルノウによって直接は明示されていない、言語による認識を突き抜けた直観の起源を、看取することができるだろう。

5. 詩歌の働きの解読へ——今後の課題と展望

以上本稿は、ボルノウの言語論、直観論、情感論を並べて読み解くことで、言語による認識を突き抜けた直観の起源を探求してきた。これにより、言語・直観・情感の密接な関係が明らかになり、直観の起源が解明されたことによって、人間の認識と「語りえないもの」との関係が新たに捉えなおされた。何より、言語以外に現実への通路を認めないボルノウの認識論が、「言語の外」に直観の起源を見定めていたという知見が得られたことは、本稿の重要な成果であった。ここから改めて、ボルノウの教育思想のさらなる理解と検証に向けた、新たな探索の領野もまた拓かれてくることになる。

例えば、言語の制約を超えた直観への回帰が、教育の重要な課題であるなら、この直観への通路となる詩歌の働きが、改めて吟味されなければならないはずである。語られた言葉と「語りえないもの」との緊張関係のうちに、直観の内実が知られている舞台があるのだとすれば、この直観をもたらす詩歌の働きとはいかなるものなのだろうか。詩作者の言葉はどのようにして、語られないまま背景に留まっている現実の十全な豊かさを、直観のうちに観取させるといえるのか。言語をもちいながら言語を突き抜けた直観への通路を開く、言語の内と外の境界を飛び越えてゆく詩歌の働きを精査することが、重要な課題として浮かびあがってくる。

この探索を進めるにあたっては、詩歌においては目に見える外観よりも情感の内実こそが重要である、というボルノウの証言(第2節の引用を参照)が、貴重な指針を与えてくれるだろう。なるほど、情感による無規定な世界内存在の発見に直観の起源を認めるとすれば、直観の獲得において再度情感が問題になるのは自然な成り行きである。直観への通路を開く詩歌の働きについての探求は、情感によって発見された世界内存在の全容を、詩歌が再度観取させるとはいかなる出来事というのか、という問題を提起するものである。

この問題を解くためには、ボルノウの認識論の集大成ともいえる、「自然」(Natur)の認識を主題とする晩年の論稿を、本稿の成果を羅針盤としながら、改めて精査せねばならない。この論稿に関してはすでに、ボルノウの高弟キュンメルが、詳細な検証・批判を実施している〔cf. Kümmel 2014〕。直観の起源に関する本稿の知見にもとづいて、キュンメルによる批判の含意を読み解き、ボルノウによる認識論の射程と限界を見極めることで、これを乗り越えていく思索の方途を探求することが求められる。このような探索を経ることにより、ボルノウに拠りながらボルノウを超えて、詩歌と「言語の外」との関係や、「語りえないもの」をめぐる知に関する、新たな洞察が得られるものと期待される。

—注—

- (1) 通例子どもの発達について考えるなら、ここで認識の媒介となる言語はいかにして獲得されるのかが、問題になるだろう。だがボルノウは、子どもが言葉を使えるようになる以前には、子どもについて「何も述べることができない」と告げ、この「暗い領域」への探求を明確に避けている〔AP: 151 & SE: 160〕。人間は「初めから」象徴的世界に生きているのだと説くボルノウは、言語の獲得以前の乳児による世界や他者との関わりなどには、ほとんど関心がないかのようなのである。
- (2) とはいえ以下に見るように、ボルノウにとって直観とは、言語による認識と無関係に獲得されるようなもの

ではなく、言語による認識を突破していくものとして、あくまで言語による認識との緊張関係のなかで、捉えられるべきものである。このような観点から、ボルノウによるフレーベル受容を再検証することは、本稿の射程を超えているが重要な課題である。これについては例えば、フレーベルの直観概念に関するボルノウの解釈を、前者の思想に見られるロマン主義の傾向を過大視したものと批判している、ハイラント (H. Heiland) の論稿が示唆に富んでいる [cf. Heiland 2003]。

(3) ボルノウの初期の著作に提示されたこのような課題意識と洞察は、以後晩年に至るまで引き継がれ発展させられていく。特に広く知られている論稿として、1955年刊行の『新たな被護性』(NG) や、1964年に刊行された『教育的雰囲気』(PA) などがある。さらに、ボルノウの教育理論の集大成ともいえる1971年初版の『人間学的に見た教育学』(AP) にもまた、情感が人間の生と教育にとって重要な働きをもっていることが、初期と変わらない筆致で説かれている。

文献一覧

▶▶ボルノウの著作については以下の略号をもちいて引用箇所を記載する。

1. AP = Bollnow, O. F. (1971) Pädagogik in anthropologischer Sicht (Tamagawa University Press: Tokyo) (Rev. ed. as: Anthropologische Pädagogik: 1973).
 2. DGW = Bollnow, O. F. (1975) Das Doppelgesicht der Wahrheit. Philosophie der Erkenntnis. Zweiter Teil (Stuttgart/Berlin: Kohlhammer).
 3. DOW = Bollnow, O. F. (1973) Die Dichtung als Organ der Welterfassung. in: 阪神ドイツ文学界編『ドイツ文学論攷』第14号.(http://www.otto-friedrich-bollnow.de/Schriften/detail/die_dichtung_als_organ_der_welterfassung-375.html)
 4. MW = Bollnow, O. F. (1964) Die Macht des Worts. Sprachphilosophische Überlegungen aus pädagogischer Perspektive (Essen: Neue Deutsche Schule).
 5. NG = Bollnow, O. F. (1955) Neue Geborgenheit. Das Problem einer Überwindung des Existentialismus (Stuttgart: Kohlhammer) (3. überarb. Aufl.: 1972).
 6. PA = Bollnow, O. F. (1964) Die pädagogische Atmosphäre. Untersuchungen über die gefühlsmäßigen zwischenmenschlichen Voraussetzungen der Erziehung (Heidelberg: Quelle & Meyer).
 7. PE = Bollnow, O. F. (1970) Philosophie der Erkenntnis. Das Vorverständnis und die Erfahrung des Neuen (Stuttgart/Berlin: Kohlhammer).
 8. SE = Bollnow, O. F. (1966) Sprache und Erziehung (Stuttgart/Berlin: Kohlhammer).
 9. WS = Bollnow, O. F. (1941) Das Wesen der Stimmungen (Frankfurt a. M.: Klostermann) (8. Aufl.: 1995).
- ▶▶▶ボルノウ以外の著作は著者名と出版年をもちいて引用箇所を記載する。
10. Fröbel, Fr. (1951) Ausgewählte Schriften Bd. 2. Menschenerziehung (Godesberg: Küpper).
 11. Heidegger, M. (1927) Sein und Zeit (Tübingen: Niemeyer) (18. Aufl.: 2001).
 12. Heiland, H. (2003) “Ahnung” und “Bewußtseyn” als pädagogische Grundbegriffe Fröbels in seinen Briefen, in: Heiland, H. und Neumann, K. (Hrsg.) (2003): Fröbels Pädagogik (Würzburg: Königshausen & Neumann).
 13. 廣岡義之 (1998) 『ボルノウ教育学研究: 二十一世紀の教育へ向けての提言 上下』創言社
 14. Koerrenz, R. (2004) Otto Friedrich Bollnow. Ein pädagogisches Porträt (Weinheim: Beltz).
 15. Kümmel, Fr. (Hrsg.) (1997) O. F. Bollnow. Hermeneutische Philosophie und Pädagogik (Freiburg: Alber).
 16. Kümmel, Fr. (2014) Spricht die Natur? Zum Verhältnis von Mensch und Natur im Spätwerk von Otto Friedrich Bollnow (Hechingen: Vardan).
 17. 岡本英明 (1972) 『ボルノウの教育人間学: その哲学と方法論』サイマル出版